

# 『中野重治全集』未収録資料二つ

大塚博

『中野重治全集』（筑摩書房）に未収録の資料を二点紹介しておきたい。

どちらも、「福岡日日新聞」に発表されたものである。翻刻にあたっては、漢字については現在一般に通行しているものに改めてある。

## 〔資料A〕

「福岡日日新聞」に、昭和十三年の八月五日から七日にかけて、それぞれ、「通説への疑問〔作家の二た筋道〕」「生活は製作の素材〔作家の二た筋道（2）〕」「結局は同じ性質〔作家の二た筋道（3）〕」という題のもとに発表されている。これは、同紙文芸欄に昭和十三年の七月から八月にかけて、「作家の二た筋道」という統一題で五人ほどが稿を寄せたうちの一つである。他の人々は、檜崎勤、渡辺順三、谷崎精二、秋山六郎兵衛の四人である。

昭和十三年といえば、周知のように、中野重治が宮本百合子、戸坂潤、岡邦雄らとともに内務省警保局によって執筆禁止の処置を受

けていた時である。執筆禁止下にあっても、ほんの二、三枚程度の随筆類が二、三発表されてはいるが、この一文のように十枚ほどの比較的まとまった文章が、東京を遠く離れた九州の地に発表されていたのである。

書いて発表する道を奪われた中野は、同年五月には、東京市社会局調査課千駄ヶ谷分室の臨時雇となっている。つまり中野は、短編小説「演習」の言葉を借りれば、詩人という「天職の失業」に「本質的に解せぬ」思いを抱きながら、慣れぬ役所仕事に毎日通うかわらで、この一文を書いたことになる。そして、文学を職業とする一方で文学以外の職業をも持ったり、同じ文学の中で互いに排斥する二つの領域を同時に職業とする場合があるとしても、本質的には「文学上の二すじ道乃至二足わらぢ」というものはないのだという主張には、執筆禁止の時期を耐えて生き抜こうとしていた中野重治の、強く熱い思いが込められていたと言っていいたいだろう。

## 〔資料B〕

「福岡日日新聞」に、昭和十五年の三月八日、十二日、十五日の三回に分けて、それぞれ、「分りやすさ」〔文藝時評①〕、「歴史の一枚」〔文藝時評②〕、「満洲の小説」〔文藝時評③〕という題のもとに発表されている。

小説や詩は別としても、文学はもとより政治、経済、社会から文化全般にいたるまで、中野重治の文章は本質的に時評としての性格を強く持っている。ただ、いわゆる創作月評風の文芸時評は意外と少ない。この一文はそうした文芸時評の一つである。

## 〔資料A〕

## 通説への疑問〔作家の二た筋道〕

文学二すじ道といふことは、言葉をかへていへば文学上二足のわらぢを穿くといふことであらう。文学上二足のわらぢを穿くといふことは、文学者としての誰しもが望ましくないこと、するところに違ひない。けれどもこの頃は、当今のやうな時勢では時にそれも止むを得ないとか、さうすることが屢必要でさへあるとか、又たとへさうでなくとも文学上二足のわらぢを穿くことは、元来一般に可能なのだとかいふ通説があるらしいがどういふものであらう？

文学上二足のわらぢを穿くことは、一般に可能だといふこの通説あるひは通説らしきものに対して私自身は、曖昧ではあるが強い疑問を抱いてゐる。

無論私ではあつても、文学上二足のわらぢ乃至二すじ道の可能性といふことを、丸々否定しやうとするものでは決してない。こゝに文学者があつて、一方では文学そのものを職業として営み、同時に、文学以外のある仕事をも職業として営んでゐる場合、又は、文学のうち互ひに排斥する二つの領域を、同時に職業として兼ね営んでゐる場合も二足わらぢ乃至二すじ道と呼ぶとすれば、これは過去にもあり現在もあり、将来もあることであらう。そのことは一般に可能であり、またある人々に取つては、しばしば必要な生き方でさへあるであらう。

しかしそれが、果して文学上の二足わらぢ乃至二すじ道と呼ばれるべきものであるかどうか、私の疑問とするところである。

実例について考へる便宜を取れば、右の場合に中る人々は決して少くはない。

シャル・ルイ・フィリップはパリの市役所の小役人であつた。杜甫は役人であつて遠い戦争にも行き、五十歳になつて初めて詩を書いた。初期の芥川龍之介や島崎藤村は教師であつた。森鷗外は生涯を通じて軍人であり役人であつた。これらは二すじ道のうちの第一の部類、すなはち文学と文学以外の仕事とを同時に職業として兼ねていた場合である。二すじ道のうちの第二の部類、文学のうちの互に排斥する二つの領域を同時に職業として営むといふのは、例へば一人のいはゆる通

俗小説作家があつて、これを生計の實際的基礎としつ、「純文学」小説をも書くといふ場合である。この場合实例を引合ひに出すことを差しひかへるが事実上この場合に於て嵌まる人々は、世間で考へてゐるらしい程には決して多くないことを私は注意したい。考へやうによつては、さういふ人間は一人もゐないと見られるらしいことに就いては後で触れたいと思ふ。ともかくも私は、右の二つの場合を文学の二すじ道と仮りに呼ぶことに必ずしも反対するものではないが、それが二すじ道であるか、ほんとうには一すじ道であるか、たとへば一葉の場合などを考へることによつて明瞭になるのではないかと思ふ。

#### 生活は製作の素材（作家の二た筋道（2））

一葉の生涯は多くの人に知られてゐる。「一葉樋口夏子は東京の人……」といふ、彼女の全集の序文の言葉を覚えてゐる人も決して尠くはあるまい。彼女は、日本現代文学の初めの時期に、「にぎり江」「たけくらべ」などの数少い優れた作品——彼女の作品がそも／＼僅かしかなかつたといふ意味からも、その後の日本文学に、これらに比べられる作品が多くはなかつたといふ意味からもさういひ得る——を残して、非常な若さで独り身で死んだ。しかもその生涯は、ひどい窮乏のなかを駈け通しに駈けぬけねばならぬ種類のものであつた。彼女が吉原で一文菓子屋を開いてゐたことは、一種の美談のやうにしてさへ今日までも語り伝へられてゐる。

しかし我々は、一葉のこの生涯を、文学上の二すじ道乃至二足わらぢとして見てゐる人の文学者をも文学史家をも知らない。むしろ我々は、彼女の短生涯を、文学の一すじ道に徹した一つの手本として、尊敬と愛情との心で仰いでゐる人々を見るだけである。つまり人々は、知らず知らず、彼女の開いた一文菓子屋をも、彼女の書いた手紙の文の手本をもすべて含めた上、そこに初めあり終りあるすじの通つた一葉の——文学者としての——生涯を見てゐるのである。

フリリツプの場合も杜甫の場合も、殆んど全く一葉に等しいといへやう。パリの小役人生活とフリリツプの作品とは決して切りはなすことが出来ない。彼の眼が否応なしに下層の人々に向けられたこと、しかも彼の眼の行つた下層の人々の範圍が狭く限られて居たことは、大都市と、その窮乏面と、その中の小役人生活とが、彼に於てかなり純粹に統一されてゐたといふ文学的事実を語つてゐる。彼の読者が、彼の作品から受けたやさしい真面目な印象を通して、彼を勤直な小役人だつたとして想像するとしても事実から遠くはあるまい。杜甫に於ては、役人生活と、その窮乏と、長い遠征と、その失敗と悲惨とは、老大な彼の全作品を一貫する主要モチーフである。

世間には鷗外をた、へる人が多いが、事実鷗外は偉大な作家であつた。しかし彼の風格をた、へる人々の多くが、侍の子、給費留學生、恩給受取人、いひかへれば一生扶持取り、知行取りであつた人のものでしてこの風格を見てゐないらしいことは穩当といへようか？ 彼の風格、特徴は知行取りのそれとして見て初めて充分に理解されると私

は思ふ。彼の「歌日記」をフルマーノフの「チャバーエフ」に比べる  
ことによつても、事は一層明瞭であらう。

結局は同じ性質〔作家の二た筋道（3）〕

いひかへれば、一葉は一文菓子屋をやり、鷗外は軍医総監、図書頭  
をやり、斎藤茂吉は現在精神病の医者として活動してゐるけれども、  
彼等の文学生活は二すじ道でも二足のわらぢでもなくて全くの一すじ  
道なのである。そして他の場合、最初の分類の第二のものについて見  
ても、事の本質は全く変らぬのではなからうかと私一個は考へる。

最初に私は、いはゆる「通俗文学」といはゆる「純文学」とを、文  
学の中の互に排斥する二つの領域とした。そしてこゝでこの見方に  
反対が出るとしても私には答へてゐる余裕がない。いづれにしても、  
問題の説明又は事欠かぬらしいと私一個には考へられるのである。

我々はこゝで、「通俗文学」をも書き「純文学」をも書いてゐる現  
存の作家を、手あたり次第に二人でも三人でも考へて見るだけでよい。  
彼等のうちのどの一人が、「通俗文学」の匂ひのない「純文学」作品  
を書いてゐるか？ 彼等のうちのどの一人が「純文学」の匂ひのない、  
正確にいへば「純文学」への色眼の感じられぬ「通俗文学」作品を書  
いてゐるか？ ある人々まで行けば、彼等は「純文学」に対して非常  
に高い標準を樹てゝゐるため、さういふ作品をなかく容易に書くこ  
とが出来ずそのためいつまでも「通俗文学」を書き続け、しかも「純

文学」に対する彼等の熱情は非常に純粹であると自らいつてゐる程で  
あるが、これは彼等が、彼等の「通俗文学」を書きつゞければ続ける  
ほど、又それを卑俗に書けば卑俗に書くほど、実現に取りかゝられぬ  
「純文学」への熱情はますます純粹に——觀念上——なつて行くとい  
ふ事情を知らぬための言葉ではなからうか？ 彼等よりも遙かに優れ  
た藝術家であるチャップリンの伝説を考へれば事は明かであらう。伝  
説はチャップリンの生涯の願ひが最も悲劇的なハムレットの表現にあ  
るといつてゐる。かういふ伝説を纏ひつけた喜劇役者としてのチャッ  
プリン一人が現実のチャップリンなのである。一文菓子屋の経営が作  
家一葉の米・味噌のために必要である限り、その経営は一つとして  
一葉の文学生活を引き裂くものではない。銀行の頭取や高利貸の親方  
の仕事に生き甲斐と人間としての義務遂行の満足とを感じる文学者  
は、その同じ底面積の上に彼の文学的四面体をせり上げてゐるのであ  
る。文学上の二すじ道乃至二足わらぢといふものは、やはり結局はな  
いものとして見なければならぬのではなからうか？

文学以外の仕事を生計のための全くの方便にしてゐる場合、文学以  
外の仕事（職業）に文学に対するのと同じ性質の真面目さで対してゐ  
る場合、同じ性質の不真面目さで対してゐる場合、すべてが文学上の  
一すじ道であるとする外はなかくそれ／＼の一すじ道自身に高下美醜の  
差別があるのではなからうか？

〔資料B〕

分りやすさ〔文藝時評①〕

藤森成吉氏の戯曲「陸奥宗光」〔改造〕三月を讀んでつくづく分  
かりい、作品だと感じた。

そして昔ある友達が、自分は好んで戯曲を讀むが小説の方はあまり  
讀まない、戯曲は分かりい、が小説は分かりにくいからといつてゐた  
のを思ひだした。この友達は文学に無關係な人間だったが、かういふ  
戯曲を讀むとつい成るほどといひ度くなりかねない。戯曲だから風景  
描写などはない。心理描写も、あるにはあるが単純明快なものだ。三  
幕十場といふ大ものだが、陸奥といふ人物が実に単純な解釈を受けて  
舞台に引き出されてゐる。

なぜかう単純明快になるのだろうか？ 「蹇々録」を見ても分かる  
やうに——その一部分はこの戯曲にも出てゐるし、岩波文庫にもはい  
つてゐるから讀んだ人も多からうと思ふ。——陸奥といふ人物はかな  
り翳の多い人物だった。奥行きのある人間でもあつた。その翳とか奥  
行きとかいつたものが戯曲からは取り除けられてゐる。例へば李鴻章  
がピストルで射たれたといふ報告が来る。そこで陸奥がどうするかと  
いふと、「立つたま、舞台全面を睨み、拳をかためながら」「千仞の  
功を一簣に欠くか？ ファナチツクの馬鹿め！」と大見栄を切つて舞  
台は「暗転」する。

また例へば石黒たちが李鴻章を見舞ひに来る。そして李の連れて来  
た二人の医者の前で「拝見する前、消毒衣を着たり手を洗つたりした  
と思ひますから」といつてそれをしてから、「これでもう傷へ黴菌  
のはひる恐れはありません。では、この手で繃帯を解かせていたゞき  
ます。」など、いふ。

あの時陸奥があんなことをいつたとすれば滑稽な話だし、この際石  
黒がこんなことをいつたとすれば、特に医者の前だけに随分と厭味な  
話だ。

しかし一篇の分かりやすさがどこから來てゐるかといふところ、から  
來てゐるのだ。日清談判をめぐる剃刀大臣陸奥の苦心經營が、在來通  
俗に考へられたり感じられたりして來た通りに舞台上に演じられる。む  
しろそれ以上だともいへることは右の二つの例の如くだ。

中山義秀氏の小説「醜の花」(同上)に比べると一層この分かりや  
すさといふことが分かる。例へば「醜の花」の書出しは次ぎのやうな  
厄介なものだ。

「久古甚太郎は園枝母娘のかさねがさねの悲劇の原因は何処にあるの  
か、余りに彼女達の道德感情が潔癖すぎて普通の男性を容れがたいた  
めだらうか、と判断の針を狂はされたやうに混乱した。」

歴史の一枚〔文藝時評②〕

かうぐるり／＼廻つて行く調子ではとても芝居のセリフにはならな

い。私は、かういふ文体で書かれた小説だから「醜の花」は深い作品だといふ積りはないが、それにしても「陸奥宗光」は、陸奥自身の「蹇々録」よりさへもつと薄手のものだと思ふ。この戯曲が、「皇紀二千六百年奉祝藝能祭脚本」として書かれたためだらうか？ それとも作者が陸奥にあゝ怒鳴らせなければ、石黒達にあゝ厭味をいはせなければ、一般見物が承知すまいと心から考へてゐたのだらうか？

あるひは両方かも知れないが、それだけ戯曲としての味が減つたことは何としても仕方がない。歴史上の人物や事件を取り扱ふには在来の通俗な解釈以上の解釈がなければ新しく大がかりに書く意識が減るのではないだらうか？

同じことが船橋聖一氏の「歴史の一枚（北村透谷）」（『文学界』三月）にもあてはまる。これは連載もので今度は発端からちよつと行つたところだが、透谷の一生を書かうといふ以上相当の力作といはねばならぬ。作者自身も前号の六号雑誌かで大いにこれを書くについての抱負を述べてゐた。

しかし抱負は抱負として肝腎の出来映えは大体いつて感心できない。今度は門太郎とおせんの恋愛めいたエピソードを一ぱいに書いてゐるが、世話ものの風な会話のやり取りがすっかり大衆小説風に墮してゐる。おせんが門太郎に髪の毛を抜かせるところなんかは六ページも書いてゐるが、「色つばいしなを」するおせんと門太郎との話しぶりは殆ど徳川期の好色物を思はせるやうでやり切れない。これも、こんなエピソードが実際あつたかなかつたかなど、いふ穿鑿は無用のこと

だ。しかし透谷といふ人は燐光のやうな人で（さういへば陸奥宗光がやはりそうだったといへやう）。その人の生涯を写すにはそれだけの心構へが作者になければならぬ。あんなだらけた会話をさせてゐて今にどうなるのかと読者として気になつて来る。

描写がだらけてゐず、しつかり引きしまつてゐる点では加賀歌二氏の「立札」（『中央公論』三月）を推すことが出来やう。加賀氏のを読むのは久しぶりでもあり、作品も、今月のもの、うちでは相当に光つてゐると思ふ。

田を潰して工場を建てようといふ地主に対して損得を離れて田を渡したくないといふ小作人の頑固さもよく描けてゐるし、いよく洪水になつて田地も家も一さい合財流されてしまふ無残な場面もよく描かれてゐる。流れる家、屋根へはひ登つた親子の家族、それへまきついて来る青大将の類の姿などは気味が悪いくらゐた。

しかし結局として作者はこの一篇で何をいはうとしたのだらうか。「工場は今日あつてあすなくなるかも知れんもんぢやと、おらア云うたぢやろ！ しかし心配さつしやるな、田圃は流れても土地ア流れアせん。土地ア万年たつてもそのまゝのもんぢや！」といふ小作人の言葉が作者の言葉だらうか？ それとも、「十日経つて水が」ひき、「二ヶ月経つて堤防の応急修理が出来た」あと、持地を見巡りに行つた地主の見つけた立入禁止の立札の残骸が作者の皮肉なのだらうか？

工場は今日あつて明日はない、しかし土地は万代不易だなど、いふのは今日素朴にすぎる。かといつて、耕地も家屋も全部流されて、「たゞ川原のやうになつたもとの田」のあたりに、縄張りも元のまゝ、立札が残つてゐたといふのも、ありさうにも思へぬ話だ。たとへあつたとしても余りに話を落しすぎる。作者はこれを書くのに、数年前の石川県手取川の氾濫を頭のどこかに置いてゐたらしいが、氾濫の予防、氾濫の事実、氾濫後の修復の問題について、それを農村問題としては考へてゐぬやうに思ふ。

そしてそれならば、あゝいふ哲学やかういふ皮肉はなかつた方がむしろよかつたのではないか？

それまで洪水の描写一点ばりで行つた作者が、勘五郎の家が地主の家へぶつゝ、かるところで、「読者が既に気づかれた如く、これは松岡の家とその門前の棒だつた。」など、書いてゐるのはどういふ氣だらうか？ 読者はそんなことに氣づかない。またそれがそれまでの描写の優れたところだ。「読者が既に気づかれた如く」などは、僅々一行にすぎないが、作者が物語りに対して何か後めたいやうな感じを抱いて動揺してゐる証拠ではないだらうか？ 石軍氏の「離脱」(『文学者』三月)は日本人の作品ではない。しかしこゝで取り扱つてはいけないといふわけでもないだらう。作品そのものも、傑作とは無論いへないがナイーヴなよさを持つてゐる。扱つてゐる問題は満洲の若い官吏(匪賊を取りしめる警察官のやうな役目の官吏)の身の上でもあ

る。次ぎから次ぎへと起つて来る「匪賊」の蜂起、捕まつて来る男の身の上、それに対する役所や警官の裁き方、さういふものがこの若い主人公を動かして、「私はもう自分の氣持に衝動、刺戟、苛薄、歎悔を受けるに忍びない。私は辞表を出して、直ちに此処を離れることにしたのだ。でなければ猛る心を抑へ、自分の魂を欺き、一切に従はねばならぬ。それは「偽君子」がよくやる清高孤傲の役割に近いが決行した方がずつとましだ。」と考へさせ、終にそれを決行させるところで話が終つてゐる。私は、こゝには問題があると思つた。一人の王が辞職したからとて問題が片づくわけではない。また王は今後どうして行くかといふこともある。しかし私の問題といふのはそんなことではない。匪賊に対する王の理解の中に、満洲人同志としての同胞感が明瞭に息づいてゐることだ。私は満洲の小説を殆ど知らないが、しかしこゝに描かれた同胞感を胸に受けて考へると、満洲の文学は非常な困難をなめねばなるまいが美しい未来を持つてゐると感じずにはゐられない。

同じく興味のもてたものに埴原一丞イチジョウ氏の「塵埃」(『早稲田文学』三月)がある。これは屑屋の建場を描いたものだ。落ちぶれた日本人と渡つて来た朝鮮人とが買ひ手でその上に親方のある風景を描き必ずしも重厚ではないが手落ちのない描写を見せてゐる。日本人屑屋と朝鮮人屑屋との相違を述べて日本人の場合は「人間の敗残者」がそれになるが、「半島人の屑屋は日本人の屑屋と全く考へが反してゐた。彼等は屑屋を将来性のある正しい職業として認めて、その中から希望を抱いてゐ

るのである。」といふのもよく呑みこめる。そこからして、古新聞「三百貫を百三十六円五十銭で買つて七円五十銭の儲け」といふやうな商売をする朝鮮人と、それに腹を立てる日本人との間に起る喧嘩なども鮮かに描かれてゐる。

この一篇も、大作とか傑作とかいふものではないがなかなか内容のある短篇だつた。